

平成24年度保小連携プログラム策定事業報告研修会

日時:平成25年3月24日(日) 14:00~16:30

会場:林業センター 会議室 参加者:65人

講師:鳴門教育大学大学院 教授 木下 光二 氏

鳴門教育大学附属幼稚園 教頭 佐々木 晃 氏

内容:1. 事業報告

2. 保小連携保育・授業公開園より(八雲保育園、タンポポハウス)

3. 講演「つながる教育 つなげる教育」

講師:鳴門教育大学附属幼稚園 教頭 佐々木 晃 氏

4. 対談「幼小連携から保育の質向上へ」

講師:鳴門教育大学大学院 教授 木下 光二 氏

鳴門教育大学附属幼稚園 教頭 佐々木 晃 氏



今年度最後の事業として、平成24年度に取り組んできた保小連携事業を振り返り、今後の連携のステップにしようと、事業講師の鳴門教育大学大学院 木下光二教授をお迎えして、事業報告研修会を実施しました。

「子どもとつくる保育」そこへ向かっていく

保小連携の合同保育・授業を公開し、木下教授のご指導を受けた八雲保育園とタンポポハウスから、

◎対象といかにかかわったか、子どもたちが主体的に対象とかわることが大切。

◎遊びに夢中にする事で、たくさんの気づきがある。

◎子どもの科学に目を向ける。

など事業を通して学んだことや感想などの報告がありました。また、「木下先生との出会いにより保育が変わってきた」という感謝の声もありました。

報告を受けた木下教授から次のような言葉をいただきました。

◎「子どもとつくる保育」そこへ向かっていくことが大切。

先生がつくるのではなく。

◎舞鶴市は保育を変えようとする姿勢を感じる。変えることは大切。変化にはきっかけが必要。自分の話がきっかけになれば。

◎難しいことをやろうとしているのがすばらしい。温度差はあるが、それは始める時期も違い、仕方ないこと。でも始めなきゃ始まらない。

◎小学校を豊かにするには連携が必要。小学校教育は、なかなか変わらない。それを変えるのは幼児教育。

◎この雰囲気が続けてもらいたい。バスを借りて、鳴門教育大附属幼稚園の研究会に日帰り来てくれて感謝している。

講演「つながる教育 つなげる教育」より

さらに今回は、当事業の研修の一つとして参加させていただいた「平成24年度鳴門教育大学附属幼稚園幼児教育研究会」で研究発表をされました鳴門教育大学附属幼稚園の佐々木晃教頭にもお越しいただき、幼児期の特性や幼児の主体性を育てるための指導方法、記録の書き方など、具体的に教えていただきました。楽しい話術で笑いの絶えない講演となりました。

◎幼児教育は個性に応じて伸ばすこと。個性を一番出せるのが遊び。遊びが幼児の主体性を促す教育の基本となる。

◎幼児期の特性を知り保育する。

◎「幼児期の遊び」の重要性
様々な活動をして神経系(脳のシナプス)の配線をより多様に形成する。

◎幼児教育は「教科書のない教育」

◇体験をもとに、意味や概念と出会い
学んでいく教育の時期

・「あたりまえ」「常識」をつかって、壊し、
また創造していく

・枠組みを作り、広げていく

◇幼児期特有の記憶の仕方
(幼児性健忘)

◇発達の個人差

◎「遊ぶ」と「遊び込む」の違い

夢中になっている

発展、継続している

遊びの素材を使いこなす我がものになっている。

◎遊びがおもしろいと学びが豊かになる

◎遊び込んでいると思っているものが、それしかないから、ひとつのもので遊んでいるだけなのかもしれない。見極めていくためにも子どもの声を拾う記録が大事。

◎保育には次の5つのポイントがある。

・幼児を理解する—心情・気持ち
↳発達
・共感する 直接かわる
・環境を構成する
・モデルになる(憧れの対象)

バランスよく取り入れることが大切。これは保育にも記録にも言えること。この視点で記録を書くと自分の保育の振り返りができる。

対談「幼小連携から保育の質向上へ」



佐々木先生は、木下教授が小学校の1年生の担任として幼小連携の合同保育・授業を始められたときに、幼稚園側の5歳児担任をしておられた方で、最後に、お二人が始められたときのエピソードや、鳴門教育大学附属幼稚園で取り組まれている保育について対談形式でご紹介いただきました。

- ◎合同保育・授業の事前の打ち合わせはほとんどなく、その代わりに終了後の協議の場が持たれており、その中で自然と次にやるべきことが決まっていく。
- ◎自由保育の反対は設定保育ではなく、不自由な保育である。
- ◎主体の反対は客体。お客さんになっている。自由でも設定でも、自分で決められ、選べ、考えられることが主体的。

対談をお聞きして、つつい事前の準備に集中してしまい、終わったと同時に安堵してしまう自分達の活動を反省しました。今回の対談についても特に打ち合わせはしていないとおっしゃるお二人でしたが、あ・うんの呼吸で次々と学び多いお話を聞かせてくださいました。講演も対談も、大変学びの多い内容で、紙面の都合で詳細がご紹介できないことが悔やまれますが、参加者の感想をいくつかご紹介して当該研修会の報告といたします。

.....

<参加者アンケートより>

- ◎子どもが主体的に遊び込める環境をつくっていくことや、エピソード記録を元に、自分の保育を振り返ってみたり、新たに子どもに対しての言葉がけや関わり方が見えてきたように思います。
- ◎保小連携を行うために保育の質の向上が必要であり、与えたり、やらせたり、保育士の思い通りにする保育でなく、子どもが主体的に活動できるしかけをできる保育者の腕が必要だと感じました。
- ◎一年生に教えてもらう、遊んでもらうのではなく、共に楽しんで育ち合うことが一番大切なんだと学んだ。一年生、年長両方が夢中になれる活動。
- ◎ひとりひとりの子どもをいかによく見て、その子をつかんでいるか、その遊びで、そこで伸ばしたいものは何か…自分の中に確かなものがないと、保育はできない…と実感しています。
- ◎鳴門幼稚園を見学させていただき目からウロコでした。また今日の話もわかりやすく、連携の大切さ、記録の大切さなども改めて勉強になりました。
- ◎記録の大切さを改めて感じました。“自由な保育とは何ぞや”ということを考える機会になりました。
- ◎つながっていくことの大切さ。信頼関係を築きながら共に向上していこうという思いの大切さを学びました。
- ◎今までのこちらがすべて用意して子どもにさせてしまっていた保育から子どもが本当の意味で選んで成長していく保育というものを学びました。まだ十分理解できたとはいえませんが、これからも学びたいです。
- ◎保育者が環境、準備など、しすぎるのではなく、子どもが主体ということを頭に置きながら、子ども同士で展開していける環境、関わりが大切であると感じました。
- ◎子どもの主体性を重視しながら、いろいろな人、事象とかかわり、自ら発見したり学んだりすることが大切であり、そのためには安心して生活し専心(遊び込む)できる生活が重要であることを学びました。
- ◎今日の講演で学んだ、幼児保育の五つの働きかけのバランス、本当に大切だなあと思われました。
- ◎保育士がすべて設定してしまうのではなく、遊び心がある環境構成を心がけることの大切さを学んだ。日々学ぶことを忘れず保育につとめたい。
- ◎講演がとてもおもしろく、わかりやすかったので、すごく興味が持てました。もっと聞きたいなと思いました。

舞鶴市の連携教育

舞鶴市を訪ねさせて頂くようになってから2年目になりました。2011年9月下旬、当時子ども未来室の職員であった西さんが、大学の研究室まで直接訪ねて来られました。保育園から小学校への滑らかな連携を図りたいという園長先生たちの声を携えての依頼でした。とても熱いものを感じて引き受けさせてもらったのが始まりでした。舞鶴市の連携事業は、現場サイドのボトムアップであることがその特徴の1つです。

実際に関わらせてもらうようになってからも様々な交流活動や保育を見せて頂き、私自身も多くのことを学ばせてもらっています。中心となって進めている八雲・由良川プランの交流活動はとても質の高いものですし、後から追随するプランも始めたばかりと思えないほど意欲的な実践ばかりです。実践があるところに課題があるのは当然のことであり、実践することで学びが生まれ、連携や保育の課題が見えることも大きな前進であるように思います。お互いに交わって、異なるものを感じて、子どもたちばかりか先生方自身が学び合うことが連携の本質であり、それぞれの保育や教育の更なる充実へとつながっていきます。

また何より感心させられるのは、どの保育園もが保育の質を向上させるため、意欲的に新しいもの、異なるものを受け入れようとしているその姿勢やエネルギーです。変えない、変わらないでいることは既知のものを踏襲すればよいだけなので、それほどエネルギーを必要としません。ただ、変えるとなると膨大なエネルギーが必要となります。保育園の環境はもとより、そこに勤める教職員、通っている子どもたちや保護者、保育園を取り巻く地域の環境に至るまで見直しや改善が必要となるからです。並大抵のことではないのですが、それにチャレンジしているのが舞鶴市であり、全国的に見ても貴重な連携事業だと捉えています。

幼児教育は今、百年に一度の変革期を迎えていると言われています。幼保の一体化、待機児童解消、子育て支援、学校種間の連携や小学校教育との接続等の課題が山積していることがその背景にあるからです。児童期においても、不登校やいじめ、小1プロブレムや学級崩壊等の課題があり、枚挙にいとまがないほどです。時代の急激な変化に伴う社会構造のしくみや関係性の希薄さが影響を及ぼしていることは周知の事実です。このような背景の中、求められるのは時代の流れやシステムの変動に左右されない保育の質を保障すること、幼児教育が児童期はもとより、それ以降の教育と密接につながることはないかと考えます。幼児期の教育が充実してこそ児童期以降の教育が充実することになり、日本の教育の未来を支えることとなります。舞鶴市の取り組みが、全国に向けてよいモデルとなることを願ってやみません。これからも焦らず、1歩ずつ進んでくれることを期待しています。

舞鶴市保小連携プログラム策定事業 講師

国立大学法人 鳴門教育大学大学院 教授 木下 光二